

Title	男たち／女たちの恋愛 近代日本における「自己」のジェンダー化(Abstract_要旨)
Author(s)	田中, 亜以子
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	2017-11-24
URL	https://doi.org/10.14989/doctor.k20773
Right	学位規則第9条第2項により要約公開
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

(続紙 1)

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	田中 亜以子
論文題目	男たち／女たちの恋愛——近代日本における「自己」のジェンダー化		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、明治から昭和初期を対象として、恋愛が「自己」の実現において重要な意味をもつものとして形成されていった過程を明らかにし、そのことを通して、恋愛という観念が、いかに男女にとって異なる意味をもっていたのかを考察したものである。</p> <p>序章において、問題関心と本論文の課題が述べられた後、第1章では、明治20年代において、近代的な「自己」への希求の登場とともに生じた「真友」という関係への憧憬が、まずは夫婦愛へと接続されていった過程と、そのことの意味が論じられている。学位申請者によれば、「自己」を理解してくれるただ一人の「真友」への希求が、近代的性別役割分業と結びついた夫婦に接続されたことは、当然、男女でその意味するところが異なっていたという。なぜなら、男性にとっての「家庭」が、「仕事」という「役割」から解放され、「自己」を実現することのできる私的な領域であるのに対して、女性にとっての「家庭」とは、男性が家庭において「自己」を解放できるように、夫を慰安する「役割」が課される場だったからである。したがって、「自己」の実現を、私的なものとしての男女の関係に求める理念は、男性を中心に設計されたものであった。</p> <p>第2章では、明治30年代から40年代にかけて、青年たちの間で、性別役割を担うことを自明の前提とする夫婦愛ではなく、恋愛といういっそう個人化された関係が希求されていった経緯が明らかにされている。青年たちが恋愛を希求した背景には、「立身出世」などの男性に課された社会的役割に疑義が呈され、そうした男性役割から自由な「自己」が追求されはじめたことがあった。しかし彼らは、夫婦愛の理念を引き継ぎ、男性を支え、受容してくれる存在として女性を位置づけていたがゆえに、そこには、自らに課された性別役割には反抗しながら、女性には自らを受け止める「女性役割」を求める、ダブルスタンダードが存在していたという。</p> <p>第3章では、日露戦争後ころから、青年たちの「自己」の追求が性別役割からの逸脱として問題化される一方で、恋愛が「男であること」と不可分に結びつくものとして再構築されていった過程が論じられている。そこでの論理は、男性としての社会的成功を優先することによって、結果として恋愛においても成功者となることができるというものであり、この主張は進化論によって根拠づけられていたという。つまり、恋愛の原動力を「種の保存」を基盤とする「性欲」におき、しかも「男らしい男」こそが「選択」されるという論理によって、恋愛は男性が性別役割を担うことと矛盾しないものへと再構築されていったのである。</p> <p>第4章では、明治30年代後半から40年代において、女性たちの間にも「自己」なるものへの希求が芽生える中で、そのような「自己」を実現する関係として「女同士の恋」が実践されていったことが論じられている。自らの才能を開花させ、「自己」を実現して</p>			

生きたいという心性が女性たちの間で生まれたとき、彼女たちが理想化していったのは、男女の関係ではなく、女同士の関係だった。というのも、女性たちは恋愛という男女の関係において、男性の慰安という「役割」を課されてきたがゆえに、自らの才能に生きる「自己」を実現するためには、男女という枠組みから離れる必要があったからである。

第5章では、明治末から大正期にかけて、女性の「自己」の追求にブレーキがかけられ、女性の「自己」は、恋愛を経て結婚し、「母」になることによってこそ実現するという論理が作られていったことが指摘されている。そして「自己」の実現における恋愛の重要性を正当化する上で重要な役割を果たしたのが、性科学であった。人間は「生殖本能」である「性欲」によって司られているとする視点から、恋愛を通して女性が男性とつがい、「母」として子を育てることが「自然」なものと観念されるようになったと、学位申請者は指摘している。

第6章では、「自己」を実現する関係として恋愛が特権化された結果、大衆的な婦人雑誌において、男性に「愛されるため」のハウツウの伝授が行われ、新たな「女性役割」が形成されていった様相を浮かび上がらせている。「愛される女」の形成という言説が登場したことによって、女性は良妻賢母となるだけでなく、男性の目から見て「異性としての魅力」をもつことも求められるようになり、それが規範化していったのである。

最後に終章においてまとめが行われ、恋愛という観念が、個人の固有性という近代的価値の希求と、性別という属性に基づく近代的ジェンダー秩序の形成という2つのベクトルのせめぎ合いの中で、両者を調和させる装置として構築されていったこと、そして「自己」なる観念が性別役割分業体制と矛盾しないものへと読み替えられていったことが確認されている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、明治から昭和初期を対象として、恋愛が「自己」の実現において重要な意味をもつものとして形成されていった過程を明らかにし、そのことを通して、恋愛という観念がいかにより男女にとって異なる意味をもっていたのかを考察したものである。近代日本における恋愛観念の成立は、これまで多くの研究が取り上げてきたテーマであるが、本論文は恋愛をめぐる思想や言説、あるいは小説のテキストを「自己」の形成という観点から読み解き、そこに潜むジェンダーの非対称性を明らかにした点において、従来の研究にはない画期性を有している。

その画期性を具体的に述べれば、第一に、恋愛が男性中心に構築されていった観念であることを明らかにしたことである。恋愛とは、学位申請者によれば、他の誰とも違う、単独でオリジナル、かつ本質的な「自己」が形成されてこそ、成立するものである。恋愛や夫婦愛は、明治20年代前半から本格的に論じられていったが、その際それは、公私の分離を前提とした、私的な領域の問題であるとする価値観とともに形成されていった。その結果、社会的役割を担うことが期待されている男性は、その役割から離れた家庭において「自己」を解放させることができるのに対して、家庭内役割を担う女性は、家庭において「自己」を解放させた男性を慰安する役割がもっぱら期待されていった。近代的「自己」の形成と性別役割分業の成立というせめぎあいの中で、男性だけが「自己」を家庭において実現できたのであり、そういう意味で、恋愛という観念は男性中心のものであると、学位申請者は結論づけている。これまでの歴史研究では、性別役割研究と恋愛研究とがばらばらに行われてきた嫌いがあったが、本論文は性別役割と恋愛とを統合して理解しようとしており、その結果として、恋愛観念のジェンダー性を明らかにすることに成功している。

さて、本論文の第二の画期性は、恋愛観念が男性中心のものとして成立したことが女性に何をもたらし、それが歴史的にどのように変容していったのかを論じていることである。まず指摘できることは、女性が「自己」を実現するためには、男性の慰安という女性役割が課される男性との関係を離れる必要があり、女性は男性との恋愛ではなく、「女同士の恋」を理想化していったということである。しかし大正期に入ると、女性にとっての「自己」とは、男性との恋愛、そして結婚を通して母になることによつてのみ実現できるという論理が登場し、「女同士の恋」ではなく、「男と女」という関係性に基ついた恋愛こそが重要なものとされていった。さらに昭和初期には、この論理が推し進められ、男性に愛されるための女性の努力の必要性が語られるようになる。このように、女性にとっての恋愛の意味づけは歴史とともに大きく変化していったのであり、これらの論理展開のプロセスが、本論文で実証的に明らかにされた。

第三に指摘しておきたいことは、女性にとっての恋愛の意味が変容しただけでなく、男性にとっての恋愛の意味も変化したことが論じられていることである。もともと恋愛という観念は私的な領域における「自己」の追求としてとらえられるものであったが、そのような「自己」の追求は、男性が果たすべき社会的役割からの逸脱と

して問題化されていった。そのような中、明治末年には「自己」であることよりも「男らしく」なることにこそ価値があるという主張が現れ、社会的に成功した「男らしい男」が女性に選ばれるがゆえに、恋愛は男としての成功を証明するものであり、恋愛の勝者は「男らしい男」であると読み替えられていくという。つまり、恋愛は、単に私的領域における男性の「自己」の追求を意味しているのではなく、恋愛と社会的成功とが関連づけられた結果、男性に課された社会的役割をより強化するものとなっていったのである。このように、明治20年代前半に成立した恋愛観念は、女性のみならず、男性にとっても、その意味するところが変化していくのであり、この変化のプロセスを本論文は明らかにしている。

本論文は、恋愛を固有な「自己」に基づいた「個と個」の関係としてとらえ、その歴史的構築過程を、ジェンダーの視点から考察したものであり、大変興味深い指摘が随所に見られる。しかしながら、本論文は恋愛をめぐる思想や言説などの分析を行ったものであるがゆえに、それらはいわゆるエリート層の思想や言説であるという限界があり、しかもこれらの思想や言説が語るものと現実世界とのズレという問題も存在している。また小説のテキストが現実をそのまま映し出すものでないことはいうまでもないだろう。本論文にはこのような不十分さが存在しているが、これらは今後の研究のための課題として残されたものであり、これによって本論文の価値が損なわれるものではないと考える。

よって、本論文は、人間形成過程における社会化の問題の解明をめざす、共生人間学専攻人間社会論講座人間形成論分野の理念に適った論文であり、博士(人間・環境学)の学位論文として価値あるものと認める。また平成29年8月7日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降